

## D・ショーンの「行為の中の省察」とデューイの「反省的思考」

久保田 祐歌

### 1 はじめに

熟達した専門職がその知識と技能だけでなく、実践に基づいてクライアントに適切な支援を行うとき、その支援のさなかでどのように省察を行っているのか。D・ショーンは専門職を「省察的実践者(reflective practitioner)」として提示し、専門職の実践における思考に分析の枠組みを与えた。現在に至るまで、ショーンの枠組みは、看護、医療、教育、社会福祉の分野において、専門職としての在り方や養成方法を検討する際の理論的基礎として参照されている。

ショーンの「行為の中の省察(reflection-in-action)」の概念の源には、デューイが提示した「反省的思考(reflective thinking)」及び「探究(inquiry)」の概念がある。批判的思考の伝統の「父」とみなされるデューイは、これらの概念により、日常の場面において物事を科学的に進める際の思考プロセスを教育にも不可欠のものとして示した。ショーンの「行為の中の省察」概念とデューイの「反省的思考」概念は、どのように対応しているのか。ショーンはどのようにデューイの概念を活用して、熟達により発揮される〈わざ(artistry)〉を核とする省察する専門職像を示したのか。この問いに答えることが本稿の目的である。

本稿では、最初にデューイにおける「批判的思考(critical thinking)」と「反省的思考(reflective thinking)、反省的思惟(reflective thought)」との区別を『思考の方法』1910年版及び1933年改訂版で確認した上で、後者がどのような思考過程であるのかを明確化する。次に、「反省的思惟の五つの段階、側面」である、「暗示(suggestion)」「知的概念化(intellectualization)」「仮説(hypothesis)」「推論(reasoning)」「行動による仮説の検証(testing the hypothesis by action)」の位置づけ及び「探究」の概念との関連も確認する。最後に、ショーンの提示した「行為の中の省察」について、デューイの「反省的思考」との関連を検討する。

## 2 デューイにおける批判的思考：「反省的思考」との相違

デューイは、「反省的思考 (reflective thinking)」を定義したことから、批判的思考の先駆者、批判的思考の伝統の「父」とみなされている<sup>(1)</sup>。デューイは、『思考の方法』の1910年版と1933年改訂版との両方において、「反省的思惟 (reflective thought)」を構成するのは、「信念や仮の知識についての、それを裏付ける根拠とそれが到達する結論に照らした、能動的かつ持続的で注意深い考察」であると述べている<sup>(2)</sup>。この「反省的思惟」の定義を、批判的思考の定義と見なすことも可能であるが、1910年版では「批判的思考 (critical thinking)」という語そのものが、以下の2箇所です明示的に用いられている。一つ目は、第2部「論理的考察」の第6章「完全な思惟行為の分析」の「反省における五つの段階」、すなわち、「1. 困難の生起」「2. 困難の定義」「3. 暗示された説明や解決策の出現」「4. 観念の合理的な形成」「5. 考え方の裏付けと結論となる信念の形成」のうちの3番目の段階で使用される。すなわち、「批判的思考の本質は、判断を保留することである。この保留の本質は、その解決への試みに進む前に、問題の本質を定めるための探究 (inquiry) である。これは、とりわけ、単なる推論を検証された推論、暗示された結論を証明に変える。<sup>(3)</sup>」この箇所からは、「批判的思考」によって、問題の本質を定めるための探究に必要な判断の保留がもたらされるという含意を読み取ることができる。

二つ目は、第2部第7章「体系的推論：帰納と演繹」のうちの第1節「反省の二重運動」の「個別と普遍」についての項目において、帰納と演繹のプロセスを説明する際に用いられる。「帰納的な動きは、結びつける原理に向かい、演繹的な動きは、個々の詳細を統一された経験へと解釈する能力に基づいて、それを検証し、確認し、反論し、修正することへと向かう。これらのプロセスのそれぞれを他のものに照らして行う限り、妥当な発見や検証された批判的思考を得ることができる。<sup>(4)</sup>」この箇所では、「批判的思考」は、「verified critical thinking」と表され、演繹と帰納のプロセスにより、判断の保留された状態であった批判的思考が検証されたものとなるという含意を読み取ることができる。

他方、『思考の方法』の1933年改訂版においては、「批判的思考」という語は用い

られていない。副題として「反省的思考と教育過程との関係の再説」が付された改訂版の序文では、確定的で明瞭な文章となるように1910年版の四分の一以上の紙面を追加したこと、特に、第2部「反省の論理的分析」を大幅に書き換えたこと等が説明されている<sup>(5)</sup>。1933年改訂版における「批判的思考」という用語の不在は、1910年版での二つの含意がすべて撤回されていることを意味するのだろうか<sup>(6)</sup>。この点について、1910年版と1933年改訂版を比較することによって確認していく。

1910年版における、判断の保留を本質とすることを含意する「批判的思考」に対応する1933年版の箇所は、第7章「反省的思考の分析」の第2節「反省的活動の本質的機能」であると思われる。第7章では、標題のとおり反省的思考が分析され、その要素が明示される。反省的思考が「観察 (observation)」「暗示 (suggestion)」を含み、関連する「データと観念 (data and idea)」が反省の不可欠の要素であることが示された上で、1910年版で述べられた「反省における段階」が「反省的思惟の五段階あるいは五側面」として、変更された形で示される。すなわち、「1. 暗示 (suggestions)」、「2. 困難あるいは困惑の知的概念化 (an intellectualization of the difficulty or perplexity)」、「3. 指導的観念 (guiding idea)、仮説 (hypothesis)」、「4. 推論 (reasoning)」、「5. 行動による仮説の検証 (testing the hypothesis by action)」が展開される<sup>(7)</sup>。ここにおいては1910年版で批判的思考の本質として示された判断の保留等は述べられず、端的に反省的思惟の五段階(側面)が示されている。

1910年版における「検証された批判的思考」に対応する1933年改訂版の箇所は、第7章「反省的思考の分析」であると思われる。けれども、ここにおいては内容が書き換えられ、「演繹」「帰納」という語は用いられるものの批判的思考との関連づけはなく、1910年版で確認した、判断の保留された状態であった思考が検証されたものとなるという含意を読み取ることはできない。

しかしながら1910年版の「批判的思考」概念の含意は、1933年改訂版において完全に放棄されたわけではない。「批判的思考」がその本質とされると言われる判断の留保について、「無批判的思考」という語を用いて説明した箇所が、1910年版と1933年改訂版との両方に見られる。まず、1910年版で述べられた箇所を確認すると、第1章「思惟とは何か」の摘要において、「無批判的思考 (uncritical thinking)」という語によって判断の非留保が述べられている。すなわち、「発生した暗示がすぐに受け入れられた場合、私たちは無批判的思考、つまり反省の最低限のことをしている。

考え込む、反省するというは、その暗示を発展させ、われわれが言うように、その暗示を裏付けるか、あるいは、その不条理さと無関係性を明らかにするような、追加の証拠、新しいデータを探すことを意味する。<sup>(8)</sup>さらに、結論を保留する姿勢は、次のように述べられる。「良い精神習慣を身につけるための最も重要な要素は、結論を保留する姿勢を身につけることと、最初に生じた暗示を裏付けたり、反論したりするための新しい資料を探すための様々な方法を習得することである。疑念の状態を維持し、体系的かつ長期的な調査を継続するには、これらは思考の本質である。<sup>(9)</sup>」

1933年改訂版の対応する箇所では、以下のように述べられている。すなわち、「しかしながら、困惑した状態にあり、また以前の経験により暗示が生まれるが、思考が反省的である必要はないことがあるだろう。というのも、その人が自身に生じる観念について十分に『批判的 (critical)』ではないかもしれないからである。彼は根拠を検討せずに結論に飛びつくかもしれない。・・・人が反省的に思考できるのは、未定の状態に耐え、探究に苦勞することを厭わないときのみである。<sup>(10)</sup>」「批判的思考」という語が使用されない1933年改訂版において、「批判的」という言葉が用いられるのはこの一箇所のみである。以上のことから、1933年改訂版において、「批判的」という語は探究に必要な判断の保留を表すものとして用いられており、1910年版の少なくとも一つ目の「批判的思考」の含意は、保持されていると言えるのではないだろうか。判断を保留するというは、浮かんだ考えをそのまま受け入れないという態度を表すとも言える。次節で見ると、この態度は、反省的思惟を可能にする前提条件としての位置づけをもつ。

### 3 デューイの反省的思惟の五側面と探究

#### 3-1. 「反省的思惟の五側面」における問題解決

反省 (reflection) が始まるのはどのようなときだろうか。デューイは、困難や困惑を含む状況にあって、それに直面するときに反省が始まると説明する。疑わしい状況から、解決された確定的な状況に至る過程において思考は働く。「反省的思惟の機能は、曖昧さと疑わしさと対立と障害がある程度経験される状況を、明白で、整合的で、解決された調和的な状況に変容することである<sup>(11)</sup>」。つまり、反省的思惟の開始

時には、混乱した、解決が必要な状況があり、反省的思惟の終了時には、混乱の収まった、解決された状況となる。デューイは、前者の状況を、「前一反省的 (pre-reflective)」、後者の状況を「後一反省的 (post-reflective)」と呼ぶ<sup>(12)</sup>。この開始時から終了時までの思考過程こそが、「反省的思惟の五側面」によって説明されるものである。

1933年改訂版における「反省的思惟の五段階あるいは五側面」の最初の側面である「1. 暗示」は、「精神が可能な解決に向かい前進する」ものとして示される。「暗示」は、知性の働きによらず、ただ生じてくるものである。どのようなときに生じるのかと言えば、問題のある状況（「自分が『穴に入ったと気づいたとき』」）においてであり、そのときに、どうしたらよいかという「観念」、このようにしたらよいという、いわば解決案としての「暗示」が生じる<sup>(13)</sup>。このとき、思い浮かんだ暗示が二つ以上ある場合には、暗示が相互に対立してどちらにするか確定にいたらず、さらなる探究が生まれる。また、問題のある状況から抜け出すための知覚の条件によって、浮かんだ暗示を受け入れるのではなく、他の観念の発生につながる場合もある<sup>(14)</sup>。このように、暗示は問題のある状況において、行動が踏みとどめられる際に浮かんでくるものである。

次の側面は、「2. 困難あるいは困惑の知的概念化」である。混乱した、解決の必要な問題がある状況から思惟の過程は始まるが、そのとき、あらかじめ問題が「課題」として設定されているわけではない。その混乱した状況のなかで、何が問題であるのかを明確にしていくのが「知的概念化」であり、これにより解かれるべき問題、答えが求められるべき問いが明らかとなる。暗示は知性の働きによらず生じるため、それに従うとうまくいかない場合がある。思い浮かんだ一つの暗示によって、すぐさま行為するのではなく、その他の可能性、条件や対象物の観察に基づいて、なぜうまくいかなかったのかに気づくことにより、困難や困惑は知性化される。例えば、穴に入ったと気づいたとき、穴から抜け出るために、観察によって穴の幅やその周りの滑りやすさが問題となることが知的に明確化され、解決すべき「真の問題、何か知的なもの」になる。すなわち、「反省的な活動が引き続いて生じるすべてのケースで、最初は全体の状況の感情的な質にすぎないものを知的化するプロセスがある。その転換は、トラブルを構成し、行為の停止を引き起こす条件により明確に気づくことによってもたらされる。<sup>(15)</sup>」

三番目の側面は、「3. 指導的観念、仮説」である。おのずから生じた暗示は、知的概念化により変容することで、「確定的想定 (definite supposition)」、すなわち「仮説 (hypothesis)」となる。すなわち、「事実やデータが目の前の問題を設定し、その問題に対する洞察が、もともと発生していた暗示を修正し、変容し、拡張させていく。このようにして、暗示は明確な仮定、またはより専門的に言えば『仮説』となる。<sup>(16)</sup>」デューイの例によると、医師や整備士は、暗示された治療法が確かに正しいと仮定する、つまり暗示を「指導的観念、作業仮説」として扱いながら事実を収集し、新たな仮説が必要とされるかを確認していく。患者が腸チフスであるとするならば、どのような兆候が見られるかを推論し、その兆候が患者に見られるかを確認する。このとき、もともとの、患者は腸チフスであるという暗示（指導的観念）は、検証され、「熟慮した可能性 measured probability」になるのである<sup>(17)</sup>。

四番目の側面は、狭い意味での「4. 推論」である。推論においては、観察ではなく、推測の妥当性の検討によって、暗示を発展させることができることが示される。デューイの用いる船上の棒についての例では、(1) 棒は余分なもの、(2) 無線電信の電極、(3) 船の進行方向を指示するもの、という三つの可能性を、観察と推論によって(3)の可能性に絞る過程が示されている<sup>(18)</sup>。たとえ暗示の内容に変化はなかったとしても、推論によって内容の妥当性が明確化されるのである。

五番目の側面は、「行動による仮説の検証」である。問題のある状況が解決されるこの段階では、仮説的あるいは条件付きであった観念が、直接的な観察や実験によって裏付けを与えられる。すなわち、「条件は、理論的に観念によって示された結果が実際に起こるかどうかを確認するために、観念や仮説の要件と一致するように意図的に配置される。実験結果が理論的、あるいは合理的に推論された結果と一致していることが判明し、問題となっている条件だけがそのような結果をもたらすと信じるに足る理由があれば、その確証は、少なくとも反対の事実がその修正の推奨性 (advisability) を示すまでは、結論を誘導するほど強いものである。<sup>(19)</sup>」

以上のように、五つの反省的思考の側面は、問題解決に至るまでの過程を含んでいるが、必ずしも反省的思考が全ての側面を順番に経ていくわけではない。デューイは、この五側面のうちのいくつかの側面が重なって生じることや、一つの側面に比重をかけて結論に至る可能性もあると説明する。加えて、五つの省察の側面を経るための規則はないけれども、間違いに気づいたときには、どこでどのような方法で間違えたの

かを確認するという、個人の裁量による賢明なやり方があることを付言する。すなわち、「それらをどのように管理するかは、個人の知的機転と感受性にかかっている。しかし、物事が間違っていることが判明したときには、賢明ではない決定に到達した方法を見直し、どこで踏み誤りが行われたかを確認することは賢明な習慣である。<sup>(20)</sup>」このように反省的思惟の過程において、状況における困惑や混乱、疑いから生まれる暗示から、仮説に基づく推論、行動による仮説の検証により、問題解決に至ることができるのである。

### 3.2 「探究」としての反省的思惟

デューイは、『思考の方法』1933年改訂版において、「反省的思考が探究を促す<sup>(21)</sup>」と述べているように、反省を探究と結び付け、「反省的探究 (reflective inquiry)」という語を用いている。この反省的思考と探究との関係は、デューイの他の著作においては、より明確に述べられている。

1916年に出版された『民主主義と教育』では、「思考が生ずる状況は疑わしい情況なのだから、思考は、探究の過程であり、事態を調べる過程であり、調査の過程である。<sup>(22)</sup>」と述べられ、反省的経験の特徴として、次の五つがまとめられている。すなわち、「(i) 困惑・混乱・疑惑。それは、情況の完全な性格がまだ決定されていない不完全な状況の中に人がまきこまれていることから起こる。(ii) 推測的予想—与えられているいろいろな要素についての試験的解釈。それは、それらの要素に一定の結果をもたらす傾向があると主張する。(iii) 考究中の問題を限定し明確にするものを、得られる限りすべて、注意深く調査すること (試験、点検、探索、分析)。(iv) その結果起こる試験的仮説の精密化。それによって、その仮説はさらに広い範囲の事実と一致することになるから、それは、さらに正確な、さらに整合的なものになる。(v) 現存の事態に適用される行動の計画として、案出された仮説に一応立脚してみること。すなわち、予想された結果をもたらそうと、何かを実際に行い、それによって仮説を試すこと。<sup>(23)</sup>」これらは、『思考の方法』1933年改訂版で説明された反省的思考と探究との関係をより簡潔に示したものと言える。

1938年に書かれた『論理学—探究の理論』において、反省的思惟は、「探究 (inquiry)」に置き換えられる。デューイは『論理学』においては、「反省的思惟 (reflective thought)」が、「探究」と同義であること、思惟の意味は、探究とは何

かによって決まることを示す<sup>(24)</sup>。『論理学』における探求の定義は、次のとおりである。「探求とは、不確定な状況を、確定した状況に、すなわちもとの状況の諸要素をひとつの統一された全体に変えてしまうほど、状況を構成している区別や関係が確定した状況に、コントロールされ方向づけられた仕方では転化させることである<sup>(25)</sup>。』『論理学』においては、『思考の方法』で説明された内容が、探究のプロセスとして詳述される。『思考の方法』における反省的思惟の五側面では、問題のある状況において、暗示が知的概念化へと移行することで検証される。他方、『論理学』においては、探究の前提条件となる「不確定な状況」から「問題の設定」、「問題解決の確定」へ至る道筋がより具体的に説明されている。

前節で見たように、『思考の方法』において、問題は始めから定式化されたものとして存在するのではなく、状況において、困惑、混乱があり、そこから反省的思惟の過程が始まるのであった。「困難が、いわば、全体としてそれを伝播し、全体の状況全体に広がっている、困惑、当惑した状況がある。困難が何であり、どこにあるのかわかれば、反省の仕事は今よりずっと容易になるだろう。・・・実際には、われわれは問題が正確に何であるかを、見出し、それを解くのと同時に知る。それまでは、問題の把握は多かれ少なかれ曖昧で暫定的なものである<sup>(26)</sup>。」

問題が定式化できているということは、解決されたことと等しい。つまり回答できるようなものとして問題を定式化するための思考過程が反省的思惟の五側面であると言える。そのとき問題の定式化は、場当たりの、試行錯誤のものではなく、仮説、推論、観察と実験、仮説の検証を通した反省的思考によって行われる。ショーンは、こうした不確定な状況での問題解決の過程を、専門職が実践において行う問題解決に位置づけ、「行為の中の省察」として、専門職の実践の中の思考過程を説明する。

#### 4 ショーンの「行為の中の省察」と「反省的思考」との連関

ショーンは、デューイの「行為によって学ぶ (learning by doing)」というアプローチを継承し、1983年出版の『省察的实践とは何か：プロフェッショナルの行為と思考』において、省察 (reflection) 過程の理論化を試みる。その焦点は、専門職の「実践知 (practical knowledge)」である。例えば、日常生活の行為の一つとして、

自転車に乗ることができるけれども、そのやり方を明示化、言語化することは難しい。専門職が実践のなかで行う判断においても、明示的に述べることができない、暗黙知とも言える実践知がある。ショーンは、こうした実践における「知の生成 (knowing)」を「行為の中の知の生成 (knowing-in-action)」として定位し、行為のさなかで、行為や「行為の中での知」について振り返り、「行為において暗黙的であった理解を表面化し、批判し、再構築し、さらなる行為で具体化する理解」について省察することを「行為の中の省察 (reflection-in-action)」と呼ぶ<sup>(27)</sup>。「行為の中の省察 (reflection-in-action)」というプロセス全体が、実践者が状況のもつ不確実性や不安定さ、独自性、状況における価値観の葛藤に対応する際に用いる〈わざ art〉の中心部分を占めている<sup>(28)</sup>と言われるように、この行為の中の省察こそが、専門職の実践の核として位置づけられる。ショーンは、専門職としての資格や職務を遂行するために必要とされる知識や技術ではなく、「実践の中の省察 (reflection-in-practice)」における専門職の暗黙知を明示化しようとする。

行為のなかの省察の対象となるのは、クライアント等の行為の対象者や対象物ではない。その対象は「行為の結果であり、行為それ自体であり、行為の中にある暗黙的で直観的な知であり、それらが相互に作用しあつたもの<sup>(29)</sup>」である。専門職は、実践において「あるタイプの状況に、繰り返し遭遇する<sup>(30)</sup>」。ショーンは、この専門職が対応する症例、ケース等で行う実践を、専門職としての知識やスキルを合理的に適用することで問題解決を目指す「技術的合理性」によってではなく、実践の多様な状況を通して働く「わざ」が核となるものとして示す。技術的合理性に基づく従来の専門家とショーンの提示する「省察的实践者」は同じ専門職でありながらもその位置づけは明確に異なる。この相違を「行為の中の省察」のプロセスによって基礎づけられた実践の認識論として示すことがショーンの中心的な課題となっている。

ショーンにおいて、専門職に「行為の中の省察」が生じるのは、デューイにおけるのと同様に、不確かな状況、困惑、混乱した状況に置かれるときである。このときに暗黙知として言語化されていなかったものについて省察が行われ、実験を通して、確定した状況がもたらされる。ショーンは、銀行家、眼科医等の事例により、不確かで独自の状況に置かれた専門職が、驚きや困惑、混乱を経験することから、省察が始まることを示す。すなわち、「それぞれの事例において実践者は、不確かで独自の状況に置かれ、その中で驚きや困惑、混乱を経験している。」そして、次のように解決に

向けたプロセスを示す。「実践者は目の前の現象を省察し、さらには現象をとらえる際の理解について、つまり、自分の行動の中に暗黙のままになっている理解についても省察を重ねる。実践者は実験をおこない、この実験を通して、現象についての新しい理解および状況の変化のふたつを生み出そうとする<sup>(31)</sup>」ことを示す。ここで、実践者が行う実験は、新しい問題の設定法を生み出し、自身の役割についてのフレームを見直し、新たな状況に適用するような「フレーム実験」である<sup>(32)</sup>。ショーソーンにおいて、専門家の省察は不確かな状況における驚きや困惑から始まり、自身の実践についての暗黙的な理解を省察し、状況を変化させるべく、問題設定や自身の役割についての枠組みを見直し実験的に実践を行うことで確定的な状況へと向かう過程として捉えることができる。

それでは、デューイに見られた判断の保留としての批判的思考について、ショーソーンにおいて対応する内容はあるだろうか。『省察的实践とは何か』において、批判的思考という語は用いられてはいないが、「批判する (criticize)」という動詞は次のように使われている。「実践者は省察によって、専門分化した実践の反復経験の中で発生した暗黙の経験があることを明らかにし、それを批判する (criticize) ことができる。実践者はまた、そのうちに経験することになる不確実で独自性のある状況について、新たな理解を得ることができるようになる<sup>(33)</sup>。」ここにおいて「批判する」という語は、これまでの暗黙の経験について批判的吟味を行うという意味で用いられていると捉えることができる。ショーソーンが、行為の中で省察を行う実践者を「実践における研究者」として位置づけるのは、こうした確定的ではない独自の状況で、それに対応した新しい理論を構築し、どのようにしたらよいかを推論し、決断するということを行っているからであると考えられる。すなわち、「行為の中で省察するとき、そのひとは実践の文脈における研究者となる。すでに確立している理論や技術のカテゴリーに頼るのではなく、行為の中の省察を通して、独自の事例についての新しい理論を構築するのである。実践者の探究は、目的をめぐるあらかじめ意見が一致している手段をどう用いるかを考察することにとどまらなくなる。手段と目的を分離せず、両者を問題状況に枠組みを与えるものとして相互的にとらえる。実践者は考えることと行動とを分離せず、決断の方法を推論し、あとでその決断を行為へと変換するのである。実験は行為の一部になっており、探究の中に、行為へと踏み出すことが組み入れられている<sup>(34)</sup>。」

ショーンは、専門職の「行為の中の省察」の事例を検討することで、その特徴を明確化し、様々な専門職に共通する枠組みとして、次の四つを定数 (constants) として挙げている。すなわち、「(1)実践者が事実や実験を指示する際に用いるレパトリー、手段、言語」、「(2)問題の設定や探究の評価、省察的対話において用いる、状況を認識するシステム」、「(3)事象に意味を与える架橋 (overarching theory)」、「(4)実践者が問題を設定するときの、また制度的な状況と結びついた役割フレーム」である<sup>(35)</sup>。加えて、ショーンは、これらの枠組みを示すだけでなく、これらが専門職の実践における省察で有効に機能するための研究の在り方を示している。それぞれに対応する研究は、次のとおりである。(1)は「レパトリー構築の研究」として、ビジネススクールにおけるように、事例、先例、典型例などの記述と分析を行うことで、独自の状況に陥ったときに用いるレパトリーの構築を助けることができる。(2)は、「行為の中の省察プロセスをめぐる研究」として、行為の中の省察の特性及びそれを促進、抑制する条件を解明しようとするとき、関与する人の行為を観察する等、認知プロセスの研究を行うことで、行為の中での省察の支援が可能となる。(3)は、「探究と架橋理論の基礎的方法に関する研究」として、実践の再認識と再構築のプロセスを実践におけるエピソードを検証することで発見する方法と、「アクション・サイエンス」の形態があり、これらにより、実践者が新しい状況を構築したり、理論が状況に合うことを裏付けることができる。(4)は、「フレーム分析—自分のフレーム (枠組み) を分析すること」として、実践者が役割や問題に対してもっている自身のフレーム以外に、別のフレームがあることに気づくことによって、実践において対立するジレンマがあることを認識したり、自身の役割として与えるフレームによって、どのような能力が必要とされるのかを認識できるように支援することができるものである<sup>(36)</sup>。

ショーンは、以上の研究がどれも実践の場を離れて行うことが可能であり、その研究によって、実践者の省察を促進できることを示している。

## 5 おわりに

以上でみたように、ショーンは、デューイの「反省的思考」の過程を、専門職の実践における省察という文脈に置き換え、「行為の中の省察」の前提条件やプロセス、

定数を明示したと言える。ショーンにおいても、省察のきっかけとなるのは、問題のある状況、これまでの実践がうまく機能しない状況に直面した驚き、困惑である。そこから、フレーム実験による自身の枠組みの捉えなおしや状況への適用などを通して、推論し、新たな行為へとつながっていく。ショーンは、技術的合理性に対置された、実践における暗黙知を働かせる専門職として、身につけた知識や技能を使うだけではない、探究に開かれた「省察的实践者」という新たな専門職像を提示したのである。

加えて、ショーンは「行為の中の省察」の理論を示すだけでなく、それを教育に不可欠なものとして示しており、この点もデューイと共通している。1990 年に出版された『省察的实践者の教育：プロフェッショナル・スクールの実践と理論』においては、専門職教育 (professional education) をテーマに、「省察的実習 (reflective practicum)」という用語を用いて、学生がコーチの支援を得ながら、実際の行為を通して学ぶ構造が分析されている。

デューイの「反省的思考」を専門職の実践に位置づけたショーンの「省察的实践」の理論については、看護や教師、ソーシャルワーカー等の専門職養成を行う分野において研究の蓄積がなされている。そのなかではショーンの理論を教育に適用することの難しさも指摘されている。専門職養成を行う大学において、学生の「行為の中の省察」を可能にする教育に向けて、ショーンの理論をカリキュラムや授業等に具体的にどのように活かすことができるかは、現在も検討すべき課題である。

本研究は JSPS 科研費 19K02898 の助成を受けたものです。

## 註

- (1) cf. Fisher (2001) ,Lipman(2003)
- (2) Dewey(1910), p7. デューイがよりよい思考の仕方として提示するのは、「反省的思考 reflective thinking」であるが、「反省的思惟 reflective thought」というように「thought」を用いることで精神的な過程を表している。cf. Dewey(1933), p113.、早川(1994)、藤井 (2010)。

- (3) Dewey (1910), pp. 37-39.
- (4) *ibid.*, p. 41.
- (5) Dewey (1933), p107.
- (6) 樋口 (2014) は、1910 年度版と 1933 年版との *critical thinking* の使用箇所の異同を比較し、デューイにおける批判的思考の意味とその特徴について詳細な比較を行っている。
- (7) Dewey (1933), pp. 200-206.
- (8) Dewey (1910), p10.
- (9) *ibid.*
- (10) Dewey (1933), pp. 123-124.
- (11) *ibid.*, pp. 215-216.
- (12) *ibid.*, pp. 199-200.
- (13) 混乱した状況で、行動を続けられなくなったとき、「暗示」あるいは「観念」が生じる。
- (14) *ibid.*, pp. 200-201.
- (15) *ibid.*
- (16) *ibid.* p. 202.
- (17) *ibid.* p. 203.
- (18) デューイは、三つの事例によって、反省的活動を説明している。すなわち、「実際的考慮 (*practical deliberation*)」は、目的地までの到達方法の検討、「観察に関する反省」は、船上のポールの用途の検討、「実験を含む反省」は、コップの泡の事例によって説明される。
- (19) *ibid.*, pp. 205-206.
- (20) *ibid.* p. 207.
- (21) *ibid.*, p. 116.
- (22) 松野訳 (1975), p. 236.
- (23) *ibid.*, pp. 239-240.
- (24) 魚津訳 (1968), pp. 411-412.
- (25) *ibid.*, pp. 492-493.
- (26) Dewey (1933), p. 201.

- (27) Schon(1983), pp. 50-51. この知の生成は、デューイの暗示と同様に、その発生が知的なものではないことが示される。 cf. 柳沢・三輪監訳 (2007) , p. 51「行為する前に考えるということはあるが、意識せずに熟練の実践をおこなう場合、そのほとんどにおいて、先行する知的操作からは生まれないある種の知、知の生成の存在があるのも、また事実なのである。」
- (28) 柳沢・三輪監訳 (2007) , p. 51.
- (29) *ibid.*, pp. 57-58.
- (30) *ibid.*, p. 62.
- (31) *ibid.*, p. 70.
- (32) *ibid.*, p. 65.
- (33) *ibid.*, p. 64.
- (34) *ibid.*, pp. 70-71.
- (35) *ibid.*, p. 289.
- (36) *ibid.*, pp. 327-340.

## 参考文献

- Dewey, John(1933) “How We Think” , in *The Later Works, 1925 - 1953*. Southern Illinois University Press. (植田清次訳 (1950) 『思考の方法』 春秋社)
- Dewey, John (1910) *How We Think*. Digireads.com Publishing.
- Dewey, John(1938) *Logic: The Theory of Inquiry*. (魚津郁夫訳(1968) 『論理学：探究の論理』、上山春平編『世界の名著 48 パース ジェイムズ デューイ』 中央公論社)
- Dewey, John(1916) *Democracy and Education*. (松野安男訳(1975) 『民主主義と教育 上』 岩波書店)
- Fisher, Alec (2001) *Critical Thinking : An Introduction*. Cambridge University Press. (岩崎豪人・浜岡剛・山田健二・品川哲彦・久米暁訳(2005) 『クリティカル・シンキング入門』 ナカニシヤ出版)
- Lipman, Matthew (2003) *Thinking in Education*. Cambridge University Press. (河

- 野哲也・土屋陽介・村瀬智之監訳 (2014) 『探求の共同体：考えるための教室』 玉川大学出版部
- Schon, Donald A. (1990) *Educating the Reflective Practitioner: Toward a New Design for Teaching and Learning in the Professions*. Jossey-Bass. (柳沢昌一・村田晶子監訳 (2017) 『省察的実践者の教育：プロフェッショナル・スクールの実践と理論』 鳳書房)
- Schon, Donald A. (1983) *The Reflective Practitioner: How Professionals Think In Action*. Basic Books. (柳沢昌一・三輪建二監訳 (2007) 『省察的実践とは何か：プロフェッショナルの行為と思考』 鳳書房)
- 大山牧子 (2018) 『大学教育における教員の省察：持続可能な教授活動改善の理論と実践』 ナカニシヤ出版.
- 加藤由衣 (2019) 「省察的実践の実践モデル構築に関する一考察—ソーシャルワーク実践の構成要素からの検討—」 『高知県立大学紀要 (68)』 pp. 55-70.
- 久保田祐歌 (2020) 「専門職教育におけるクリティカルシンキングの位置づけについて」 『中部哲学会年報』 51 号, pp. 77-87.
- 早川操 (1994) 『デューイの探究教育哲学：相互成長をめざす人間形成論再考』 名古屋大学出版会.
- 樋口直宏 (2014) 『批判的思考指導の理論と実践：アメリカにおける思考技能指導の方法と日本の総合学習への適用』 学文社.
- 藤井千春 (2010) 『ジョン・デューイの経験主義哲学における思考論—知性的な思考の構造的解明』 早稲田大学出版部.
- 吉田謙二 (2003) 「第2節 デューイ論理学の再評価」, 杉浦宏編 『現代デューイ思想の再評価』 世界思想社.
- 吉浜文洋 (2018) 『看護的思考の探究：「医療の不確実性」とプラグマティズム』 ゆみる出版.
- ゲーリー・ロルフ著, 塚本明子訳, ゆみる出版編集部編 (2017) 『看護実践のアポリア：D・ショーン《省察的実践論》の挑戦』 ゆみる出版.